

きざねのたね

NO.75 月刊

第九輯 系譜篇 第十号

昭和廿九年九月一日 発行 (一非売品)
 岡山県都窪郡吉備町東町一五 宇垣方 呼電四三七
 吉備親老協会

第65号編き

○ 草野家系 (第七輯人物篇草野家江参照)

その先祖は元禄年中三河國から移住すといふ。

草野竹次郎 八十五才

明治廿八年四月廿九日北

妻 菊野 八十三才

明治四十三年四月廿五日北

某女 明治廿九年十月廿四日北

某女 明治廿四年八月廿二日北

岡山市大宮寺 在籍氏より

蓮美 養子

妻 千代子 庭瀬、御船老之助

の次女

○ 御船家系

○ 御船家系

御船万吉

昭和三十年北

妻 虎之助 (カキカ在住)

信子 岡山市中仙道大村忠篤に嫁ぐ

千代子 草野家に養女

○ 山口家系譜

○ 山口家系譜

本姓は森氏、その先祖は京都の人にして禁中御用を勤めた勅許御合樂司森肥後守大塚の世である。本家は屋号を大黒屋といふ。その分家にして正徳二年に故あつて備前岡山へ移り、繁種園を営み、三年後更に撫川に移つてきた家筋である。(一署祖記による) 禁中御用、京都本家御製法所、下立亮室町西へ入ル町北側勅許御合樂司 森肥後守大塚 (正保の頃) 禁中御用大黒屋分家 同所室町通中立亮角 御香具司藤井播磨守の二男相結す 本家は藤蔵といふ。一條殿御内 田辺美濃守の甥 清右衛門相結す (正保の頃) 元祖出店 小兵衛惣吉 正徳二年京都ヨリ備前岡山 仲買町ニ移住 藤店也。正徳五年庭瀬、撫川町ニ住居藤店 妻以津 岡山藩家中祿二百石波多野助七郎の娘 喜兵衛惣吉 元祖惣吉の甥、妻ハ楚典 (享保の頃)

伊兵衛惣吉 享保

本姓ハ鬼島郡宗津三宅氏ニシテ大庄屋ハ郎兵衛 当回高沼村宗

某女 伊兵衛ノ妻

某女 岡山磨屋町和氣屋長蔵ニ嫁グ

友蔵 天城家中祿百石杖氏ヲ相結ス

惣五郎 (本家ヲ統ゲ)

琴 当町吉田紋治郎ニ嫁グ子ナシ

志三郎 回沼郎

九左衛門 篤義

妻 繁 (安永ノ頃)

淡口即拍島村奥右

木屋赤沢嘉七郎

今家定十郎ノ娘

妻 当町 銘屋 役六

郎ノ相結人三

宅喜助ニ遣ハ

又

植五郎 小兵衛

妻以津子

○ 前原家系

安吉 吉三郎ノ妻 繁ノ弟 (一定十郎ノ末子) 相結ス 庄島ニ移ル (天保ノ頃)
 律 (リフ) 安吉ノ妻
 惣吉 惣三郎 理三郎 義夫 東町一八番地に住す。 観音院は菩提寺。

○ 前原家系

その先祖は菅田郡番々美南村(鏡野町)の出にして、代々この地の神宮を勤めた家筋である。明治廿九年頃、由衛の北後故あつて庭瀬町西花尻に移住した。
 前原播磨守 文化十二年五月廿五日北
 前神子 文化三年二月廿八日北
 妻 織野 若播磨守の娘 七十五才
 安政三年四月廿七日北

菅原元年六月廿日北

前神宮 前原貫守 重義 五十三才

妻 左近 明治八年九月七日北 六十才

久田 黒木村石田甚右エ門ノ長女

神宮前原由衛 六十五才

妻 古里 明治廿三年五月廿日

於竹 弘化三年八月廿日北 四才

小竹 文久三年十一月廿日北

浅六郎 元治二年三月七日北

明治廿二年一月廿二日北

妻 喜市 三十五才

妻 杉野 明治廿八年二月十九日北

儀作 (妻は松野)

○ 東ノリ (当主)

久沼 満洲にて北去

勲 岡 西山氏に養子

五月十一日 手丸才三ノ島空シクにて戦死 正義院報 同日忠居士

(昭和廿九年四月二日 二十五才 北島妙高山方面にて戦死 正義院報 同日忠居士)

○大賀家系譜 (一葉三精 堂字爲 岩野山金剛院參照)
大賀駿河守 勤大夫 景五郎 次良右衛門 武右衛門 官五郎
(永祿元惠の頃) (慶長の頃) 宗岡信士寛文五年八月廿六日 延享七年七月廿六日

喜右衛門 幸次 室曆三年八月廿九日 文太郎 能治郎 明和八年七月廿六日 安永六年七月十五日
喜保七年八月廿九日 四光義固 智月常直信士 喜右衛門 法嚴院觀心信士
妻 觀月自照信女 明和元年八月十四日 法嚴院志光妙隆信女
喜保十三年六月十五日

佐助 慧慈直道信士 老蔵 還真直道信士 夜作 心鏡定徹信士 富三郎
安永六年九月十五日 文化元年五月十日 文化七年三月廿三日 天政九年七月四日
妻 智光院志光妙隆信女 妻 臨岸妙母信女 妻 心蓮妙到信女 文化七年五月廿二日

龜三郎 根倉藩 綱六 宮海吉備津宮社家 河津家コリル 義海菩薩大正八年十月日
二八扶持 幼名 義太郎 妻 道子 (キリスト教信者)
明和四十年九月十八日 勝吉 父の出所河津家と相續す
岡山市東中山下三十番地に住す

○友沢家系譜 本姓は大塚氏である。大塚氏家系に
大塚の先祖は帝國下総に於て、其後美濃國に居住した由に傳へ居り候へ共、先年系書紛
失仕り候ニ付詳に相分り不申、中祖大塚將監と申すもの天正年中に信州松代城主森武藏
守右近大夫長一の家臣に相成り、慶長八年作州津山城へ移られ賜ひ考り申候、其後慶長
十一年年備守大塚惣兵衛は森美作守從三位中将忠政より賜俸祿の書類等は今に所持仕り
居り申候、惣兵衛は至り延享二年有故て浪人仕り 當七島村(三島市)へ参り住居
仕り友沢惣兵衛と改名仕り申候 一女御座候て道談村大庄屋大島伊介三男を養子に黄
い請け 甚母と相改相續仕り候 其後七島村名主役を勤め 右甚母に何付ら北候後に
多三郎と改名仕り申候 元文元年四月晦日死仕り候

×大塚將監 帝國下總國信州松代城主森武藏守長一に仕不 慶長八年森氏津山城に移り
これに従ふ 惣兵衛 慶長十一年森忠政に仕へ代官取 禄高五百石知行 高田十兵衛、甚兵衛は高田に於て養子となり延享二年
監物 (勝山史に慶長十四年森忠政の老臣勝山城代となり 五在この城に居る)
左門 甚右衛門 甚兵衛 高田石五十石知行 實は高田文四郎の子、文四郎は加藤藤遠江守家臣
於此 延享七年十月四日北望雪妙光禪定尼 高田十兵衛、甚兵衛は高田に於て養子となり延享二年
法名心翁共伯居士浪人右友沢惣兵衛正と改め上着す

友沢甚内清繁 多三郎 實は道鏡大島伊兵衛の三男、伊兵衛は北條氏綱の臣、大島孝子郎の赤孫。元祿
十五年養子、享保十三年七月七日七島村名主孫介後御免、同年八月廿四日甚内に仰付らる
同十一年正月多三郎と改名、享保十二年丙辰年四月廿八日 量岳道持居士

吉治郎 妻 赤崎村小野七十郎の女、安永八己亥年九月朔日北蘭溪慈秀大姉
三次郎 清親 吉治郎は伯父に當り赤崎新町川崎屋佐平治方に享保十五年五月商賣見習の左め奉公す
安治郎 下紙尾村吉田惣兵衛の養子となる、後より伊平太と改名す。
儀右衛門 池田鴨方藩高木右衛門の養子となる
加屋 鳴地瀬良大兵衛の妻、寛延四年六月廿九日北玉芳妙頼信女 竹右衛門 芳介
甚右衛門 明和二年五月十六日病死、隨岳良縁居士 妻は江原平井
元右衛門 明和二年九月十五日名主、寛政二年戊午年十月廿七日北港如道伯居士 六左門の女友沢
妻 常 下通郡服部村水川藤兵衛の女、水川氏後より西氏に改む 善治兵衛の妹
寛政八年丙辰年五月九日北望雪妙光禪定尼 吉治郎

善治兵衛武付名主、文政三年辰年九月十日死、大才徳尊至善居士
里奥 玉島西町善濃郡長十郎に嫁ふ
鶴右衛門 矢掛町天野屋に養子、後より龍智と岡山藩に仕へ大塚保右衛門と改名、嘉永七年正月
十五日北 仙岳敬慎居士 岡山市水雲寺に葬す
女 早女 天明五己巳年四月五日北 幻草童子

善哉清通 文化十四年名主、文久三年七月廿九日北六十六才、仁孝義彰居士

專 逸 浅口郡六條院西村吉田藤兵衛の女、慶應四年辰年七月五日北六十三才貞松再永之姉

秀 禮 道越村 大島猪矢衛の妻

女子某 窪屋郡酒津村梶谷伊平治の養子、別家として健蔵と改む

敬登介 下道郡山田村 里正 菊池貞兵衛の養子、万延元年十月十日北一才、大里正となる

岩 早生 弘化二年二月三日北 梅頼清香童女

吉三郎 早生 文政十二年六月三日北 志心童子

峯美里 嘉永元年八月六日北 晴窓実蓮大姉

鹿沼郎 保治 嘉永四年三月九日名主、元治元年二月廿五日氣節組首軒帯力御免

妻 茂 辰尾村 田辺雄二の二女 法名 修徳院

多加 道越村大島猪矢衛の六男、民立介の妻、安政四年十月十四日北一才、到岸妙船大姉

岩 早生 弘化二年二月三日北 梅頼清香童女

岩三郎 鶴治郎 八三郎、弘化三年七月廿四日生 北不詳

好太郎 清範、安政二年十月廿三日生 再野 倉敷市本山殿大郎の妻

竹 安政四年八月廿九日生 北不詳

貞三郎 徳治郎 清卿 文久元年八月廿三日生 昭和四年八月廿七日北六十九才

妻 登典 池田藩國老金川一万六千石日置帯力の家臣藩医北村綱有の二女

少浜 昭和四年八月廿七日北六十九才 妙珠院 慈徳貞豊大姉

善智 慶應三年四月十二日生 明治元年七月朔日北淨観妙蓮童女 三才大

憲政 明治廿三年四月廿七日生 崎上入間郡梅園村菩提院住職、昭和九年某月玉島市田通寺に北三才

再祺 明治廿六年一月廿四日生 吉備町庭頼に任す

妻 友乃 明治廿五年三月廿二日生 庭頼町手野 大田里次郎の二女

鶴子 明治廿九年某月生 備前鳥取上村 橋本 暢の妻

克孝 明治廿二年八月廿一日生 昭和廿六年一月廿七日北六十三才 俊徳院 至順 孝居士

龜代 明治廿七年三月十日生 鬼島郡八次町 手嶋氏に嫁ぐ

正身 明治四十年一月廿三日生 昭和十一年北三才

千萬子 文北 明治廿五年一月廿七日生 母の生所、北村熊三郎の養子

X

今度江戸御供仕り候付趣、請文前番の事

津山より御供中罷出道中御宿ニ而も無法度ヶ間敷義一田ニ仕間敷候御事

はくち多座也狂心致仕間敷候御事

江戸御宿道中御傍輩中へもむさよ阿州引(無作法)申ましく候若用所有レハ御理り

中上其上にて罷出候御事

御公儀御法度一田に相替申間敷候御事

内証様(津山城主森長健、従四位侍従)の御家の御法度猶以堅相守可申候御事

主人の物は不及申上傍輩中之ものニても銀子毫分ニ序も銭毫文に序も理りなしニ取

替申まじき御事

町へ罷出理り口(不明)も不申上むさよとあり引申まじき御事

御尚主などニそう路り(淨満満)こうた(端歌)などうたい申まじき御事

下々ハ小性共申付候義少(すこし)無異儀奉公申レ口口(不明)小性共之内下

々ニ而も悪き者お有レハ早々主人へ可申上候御事

主人御傍輩中へ遊口(不明)仕間敷候若惣傍輩中申惡ヶ仕間敷く様子有之候口口

口(不明)理り口口中能可仕候御事

右指ヶ條之趣、相守可申上候若御相替者日本國中大小之神祇ハ幅大菩薩になり、き

おん(稻荷、祇園)御馬廻ハ一宮 二宮(中山神社と高野神社)氏神御怒蒙り可申候

まつたく相背申ましく候御取請文如件

明曆元年 申、戊後四月廿六日
河原又右衛門 血判 同 又右衛門 小川加兵衛 久蔵 角介 五介 大倉作右衛門
加左衛門 同 林 五兵衛 岡 仁兵衛 分介 市介 市介 河原又右衛門
佐右衛門 同 惣右衛門 浅井長右衛門 八介 才蔵 面介 林田町武右衛門

進上大塚甚右衛門様

大塚甚右衛門は友沢家の始祖友沢興兵衛正之の養父である。この請文は甚右衛門が城主に從ふて江戸表へ出仕を命ぜられて、津山から江戸へ御供をする道中や江戸滞在中に家中のものを不都合なことを起さないうよう覚悟を主家の手元へ提出した誓約書である。藩政時代には徒歩によつて風俗習慣の異つた他國領を幾日もかかつて旅行するのであるから問題が起り易い。そこで供人たちが間違を起さないことを神佛に誓ひ、血判までしてゐる處はおもしろいではないか。

知行之事

- 一、知行之事
 - 一、七百七拾四石六升一合 久米北條郡福田村
 - 一、六百七拾七石二斗七合 同郡戸陽村
 - 一、六百四拾九斗七升四合 同郡中井細小山村
 - 一、六百三拾七斗五升八合 勝北郡石生村
 - 一、六百三拾三石一斗二升 勝南郡位田村
 - 一、六百四拾六石八斗八升 吉野郡阿津町村
 - 合五百石
- 右今扶助身全可知行之状如件 慶長十一年 十一月六日 忠政 (花押)
- 大塚惣兵衛とのへ 大塚甚兵衛とのへ 長継 (花押)

長継は二代の城主にして、甚兵衛は惣兵衛の孫に當る。實は加藤遠江守の家臣萬田文四郎の子にして、大塚家に養子となり、延宝二年に浪人して津山を去り、武口郡七島村(玉島市)に住し友沢姓を名乗つたのである。(万治元年は甚兵衛十四才であるから浪人した延宝二年は三十才の時である)。

大田家系譜 (第七輯)

大田家系譜 (第七輯) 人物篇 大田 収(参考)

元四郎相讓 明治四年十二月十七日北六才
妻 塩安政三年六月廿四日北 妻 鹿野大正五年三月三日北 八才
傳四郎相清 明治九年六月廿九日北五才
妻 昭子昭和六年九月廿日北 五十七才
始四郎 實は吉備郡川辺村日枝文政 七十一才

始四郎 宗次郎明治元年五月十日北二十八才母は八才代
母は石枝 健一 康二 三郎 隆四郎 佐木家を嗣ぐ
収 明治廿三年一月十二日半 母は石枝
妻 難波 一の子、弘子大正九年三月一日北
信妻 藤島大藤夫の長女利子 昭知七年八月廿日北
登茂江 登茂子
芳子

助右衛門宅房 寛文七年六月御切符金六兩四人扶持
大兵衛勝章 大兵衛宅高
助六郎宅友 (以下略)

(参考) 手代木家系譜 合津藩士高二百石 高二百石
吉次郎 六右衛門宅次 六右衛門宅勝 女三人
享保九年二月家督知行百石

大兵衛勝福 — 大兵衛門勝頭 — 又吉勝富
 室督七年知行百石 寛政十年知行百石 知行百石

勝任 宅廣 早生
 元枝 初め何某に嫁ぎ、其の二女を生む
 後、誰別した田舎四郎に嫁ぐ
 中枝 (元枝十五才中枝八才、下枝三才の時
 下枝 (合津勝助あり親子五人諸國を浪轉す)

× 佐々木家系
 佐々木源八
 勝任 手代木勝富の養子
 主馬 名勝任の嗣を継ぐ
 只三郎 同族佐々木大夫の養子となる。京都見廻組兵頭となり、文久三年四月
 清川八郎を斬る。慶應三年土月中岡慎太郎、阪本龍馬を斬る。

源四郎 只三郎の中継養子となる。
 只三郎并に源四郎の墓標は、細歌山、市外、紀三井寺、瀧之坊にある。同寺位牌に
 賢浄院殿義岳亮雄居士 慶應四年正月六日 旗本格名佐々木唯三郎高城行年三十六歳
 蓮池院殿清光日実居士 慶應四年五月 旗本格名佐々木源四郎高城行年三十四歳
 とある。同寺傳記によれば、只三郎は高羽伏見の戦に官軍と戦つて負傷し、紀州家の
 榮の屋敷をつけた長持子にはいつて、部下二百名と共に紀三井寺に落ち、ここに
 療養したが、ついに死んだという。源四郎は慶應四年五月の末、江戸にて官軍に襲は
 れ、討死したという。

野崎家系譜 (一) 第七輯人物篇野崎広太。第三輯寺院篇中正院参照)
 種則 宗善 寛永二年八月廿七日 内理院 寛保三年十月廿九日
 妻 妙宗 寛永四年正月八日 妻 丹 誠院 宝永五年三月六日
 只三郎 理院 宝永七年八月二日 台妻 田 珠院 享保六年三月七日
 台妻 富 見性院 寛保二年十月七日
 手次郎 順院 元禄二年八月十一日

順殿 内理院 寛保二年十二月九日
 妻 修善院 享保十六年十月廿日
 台妻 老相院 寛保二年十月九日

助三郎 敬尊 八十三才
 延封院 明治三年六月廿日
 妻 蓮池院 和化五年三月十五日

通忠 聖光院 三十八才
 嘉永四年九月十日
 妻 はつ 明治廿二年二月廿七日
 七十三才

通種 隨縁院 明治十五年三月廿日
 五十二才
 妻 政 智徳院 文久三年六月廿二日
 台妻 雪 智老院 妙縁信女
 七正四年七月廿日
 女 四人
 興志 庭瀬藩中西政愛の妻

直右衛門 勝任 日藩士佐々木源八の子。登藩台明治
 六年川上、曾陽、西條條等の副長後、
 關山正長(市長) 明治廿七年六月三日
 七十九才にて同山、野田町富居に死
 去す墓は、山にある。

高 明治二十年七月死 廿二才
 木田 稔の四男養子
 隆四郎

助三郎 通之 十八才
 智性院 明治九年九月廿二日
 宇多 二十才
 就馬院 天明六年十月十三日
 金十郎 通定 二十八才
 耀三院 享保二年七月廿日 三十一才
 孝長 玉照院 明治七年九月四日
 女 秋月院 天明七年八月十日
 愈喜 詮天妙持安永五年七月五日
 二十四才
 台妻 眞浄院
 文政二年十二月十九日

加弥能信院 同中平井吉岡惣心六郎に嫁ぐ
 廣太 妙幻院 昭和十六年十二月二日死 八十三才 一精一
 妻 勢以 大正五年十月五日死 四十二才
 龜吉 長門國吉馬岡益崎長身多美食
 子 明治廿九年一月十六日死
 東京都枚並一尾下高井
 戸四丁目九一九に住す
 (おわり)

店 食事
 喫茶 Meiji 明治
 吉備局 電話三三五
 庭瀬駅前通

御気樂に御相談下へ、責任者 森安義夫
 吉備不動産相談所
 吉備町庭瀬六四七
 電話一五五番
 有線一〇三番